

がんの逆襲

Dr.

和



「抗がん剤」シリーズ⑧

「抗がん剤で腫瘍マーカーが下がった」と喜び勇む患者さんは、誇らしげに自家製の折れ線グラフを見せてくれました。あんなに苦しい思いをした代償として、腫瘍マーカーが低下することは良い知らせです。上がるよりは下がる方がいいに決まっています。

治療を拒否しているがん患者さんの腫瘍マーカーは当然、徐々に上昇しますが、どこかで止まることもありません。まれに何もしなくても自然に下がることも。なにかの間違いかなど思うときもありませんが、2〜3カ月連続で下がると本物です。

腫瘍マーカーの動きは決して一定ではありません。ちょうど台風の進行速度が変化すると似ています。

腫瘍マーカーの低下と延命効果

抗がん剤で腫瘍マーカーの値が下がったと安心するもつかの間、すぐに息を吹き返すがんもよくあります。以前にも増す「勢い」であることも。腫瘍マーカーの動きをグラフに書いてみると、「抗がん剤で下がったとき」よりも、「治療を中止した後に上がる」ときの「勾配」の方が「急峻」であることがあります。

結局、その患者さんは、あつという間に旅立たれました。亡きがらを見ながら、その患者さんの抗がん剤治療の経過を振り返ります。腫瘍マーカーが下がって喜んでいたら、反撃に転じたときの勢いに、すさまじさを感じることがあります。もはやその時には最初に効いた抗がん剤は無効になっていきます。がんを攻撃するときには、そうした「反撃」を覚悟する必要があります。MRS Aなど抗生物質耐性菌や、タミフル耐性インフルエンザウイルスなどを連想してください。実はそうした現

腫瘍マーカー がん組織から血液中に放出される物質で、がんの大きさや進行度とある程度相関する。大腸がんのCEA、肝臓がんのAFP、膵臓(すいぞう)がんのCA19-9、卵巣がんのCA125、前立腺がんのPSAなどが有名。

ときの笑顔が鮮やかに思い出されます。あの笑顔はいったい何だったのでしょうか?

手術した肝臓がんの組織を調べると、珍しい「低分化型」でした。低分化型とは「タチが悪い」という意味です。そのようながんは、たとえ2センチでも立派な進行がん。

腫瘍マーカーの低下と延命効果は、必ずしも一致しないケースを何度も経験しました。実は、がんが抗がん剤の闘いは、単純なゲームのようにいかないようです。もっと複雑でその時々によって、戦局が変化するので。

抗がん剤にやられっぱなしだったがんが、何かの拍子で象を、外科手術のあとにも経過しました。胃腸風邪のような腹痛で初診された患者さんのおなかにエコーを当てました。肝臓の奥の方に2センチの影を発見。専門病院に紹介したら「肝臓がん」でした。酒も飲まず肝炎ウイルスも陰性でした。直径2センチの肝臓がんに対して外科手術が行われましたが、わずか2カ月後、両肺に転移巣が発見され、再び切除に説明します。

このように、タチの悪いがんに対して闘いを挑むときは、逆襲も覚悟しておく必要があります。ただ、こうしたがんの世界にも敵しい上下関係があります。詳しくは次回に説明します。



長尾和宏 (ながお・かずひろ)
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。労働衛生コンサルタント。関西国際大学客員教授。54歳。ブログ(<http://www.nagaoclinic.or.jp/doctorblog/nagao/>)が好評。